北海道はひとつの国

17歳新聞
2014 2月
[第12号]

プロにおハナシ聞いちゃいます！
おしえてシゴト人

北海道日本ハムファイターズ
監督
栗山 英樹 さん

1961年生まれの52歳。小・中・高の教員免許を持つ。東京学芸大卒業後、プロテストを経てヤクルトスワローズに入団。1989年にゴールデングラブ賞を獲得し、翌年に引退。その後はスポーツキャスターや野球解説者、大学教授として活躍し、著書はもちろん歌も出す。2012年に北海道日本ハムファイターズの監督を務め、1年目でチームをリーグ優勝に導く。栗山青年会議所の30周年記念事業に招かれたことをきっかけに、2002年に私財を投じて『栗の樹ファーム』を設立。道産子と北海道の良さを全世界へ伝えるというHOKKAIDO PRIDEをコンセプトに、2014年は日本一をめざし、北海道に歓喜の輪を広げる。

▲ サイン色紙には「夢は正夢」、持ち物には北海道の形の刺しゅうを入れている。

聞くと向き合う

一直線。栗山監督を一言で表すにはぴったりの言葉だ。高校生のときは、ただひたすら野球に熱中し、プロ野球選手を夢見ていた。しかし、父親に「プロは40歳くらいで終わるけど、教員になって野球を教えれば60、70歳まで野球のそばにいられる。本当に野球が好きだったら、どっちがいいのか」と言われたことをきっかけに、指導者の道も考えて大学を決めた。

▲ 選手と交わす、おかえりのハイタッチ。

「人に教えるというのは、まず人の話を聞くこと。自分から言いたくなってしまっても言わずにいられるのは、教員になる勉強をしたことが大きい」という。大学時代に学んだことは、監督という仕事にも役に立っているようだ。

勝つと育つのバランス

栗山監督は選手の成長を一番に考える。「僕がクビになって、ファンが喜ぶぐらいに選手が成長するならそれでいい。人が育つことほど大きな財産はない」。プロ野球は「結果が出なければ、努力した過程さえも否定されてしまう可能性がある」というほど厳しい世界だ。昨シーズン、二刀流として注目された大谷翔平選手には「翔平は怪我なく本当によくやった。今シーズンはとにかく成長を結果で示し、勝ってファンを喜ばせてほしい」と、成長と結果の一致を期待する。

▲ ファンの喜びが舞い上がる札幌ドーム。

勝利に向かう姿勢と目標達成のための逆算も絶対に必要であることを教えてくれた。栗山監督の「勝つ」という言葉がとても力強かった。きっとそこには、ただ結果を求めるだけではなく、選手の成長とファンの喜びを第一に思う『愛』があるのだろう。

信じ合い、支え合い

「信じている」という言葉も印象深い。まずは選手への信頼。一年に144試合あるなかで、思うようにいかないことはたくさんあるはず。監督の気持ちを前面に出すことが、選手のプレッシャーとならないよう、試合中に心がけていることは「どんな結果が出ようと、俺はお前たちを信じたから、好きにやってこい」という気持ち。昨シーズン見られた大胆な選手起用も、信頼からくるものに違いない。

つぎにスタッフへの信頼。頼りにしている人は？の質問で、真っ先に出たのが球団スタッフの存在。スタッフからの声かけは、大きな『ちから』となり背中を押される。「褒めてもらえない裏方が、自分に負けないくらい球団を愛している。一緒に仕事ができて幸せ」とコーチや球団の支えに感謝している。

▲ 選手を信じて決断する栗山監督。

そして、ファンからの信頼。「90歳の方からも励ましの手紙をもらうんだ。それを読むと、冗談でも『しんどい』なんて言えないよ」とファンにも背中を押される。最下位であった昨シーズンの札幌ドーム最終戦、試合に負けても大勢のファンは途中で帰らずに、試合後の監督の言葉を待っていた。これはファンからの期待と感謝の表われだろう。

北海道日本ハムファイターズは『信頼』で成り立っている。

編集新聞局員

編集長　第12号編集長　澤山 初音
編集者　池田 くるみ　吉田 佳乃子　高橋 麻莉　宇佐美 舞
発行責任者　局長　澤山 初音　顧問教諭代表　横山 学

取材協力

北海道日本ハムファイターズ
www.fighters.co.jp

2014年5月4日（日・祝）
第8回スプリングコンサート
札幌市教育文化会館 大ホール　15:30開場／16:00開演
吹奏楽局
入場料 500円
平成26年度に吹奏楽局は創立20周年を迎えます。
OB・OGのステージもあります。どうぞ、ご来場ください。

第4回 高校生のための社会学入門
ボランティア活動について考える
～あなたならどうする？災害ボランティア活動～
2014.3.23（日）9:30～15:30
お申し込み・詳細は札幌大谷大学WEBサイトへ。
札幌大谷大学　検索

特設WEBサイトで紙面に掲載しきれなかった記事が見られる！
www.s-ohtani.ed.jp/17

布団とうどん

体調管理で気をつけていることは、布団には絶対に入ること。試合中は突然の出来事にもその場で即断しなければならない。「悔いのない判断を下すためには、常に考えるスピードを全速力に保つことが大切」という。布団に入っても眠れない日はあるが、判断が鈍らないためにも、体を休めることを心がけている。監督業はなかなか心労が絶えない仕事だ。お酒も飲めなくなり、1日3回の胃薬は欠かせない。「ストレスでお酒の量が増える監督もいるけど、僕は飲んだら体を壊してしまいそう」と言うほどだ。「いつもと違うものを食べると選手にアクシデントが起きてしまわないか」という気持ちと自分の体への気遣いで、もっぱら札幌ドームの試合前は美味しくて消化のよい関西風うどんを食べている。

▲ リーグ優勝４回のペナントが並ぶ球団事務所。2006年は日本一。

北海道は一番

栗山監督は「北海道はひとつの国。ほかのどの国にも負けない」という。それは「人と大地」がすばらしいから。私たち道産子の何気ない行動にも驚くそうだ。例えばバスやＪＲなどの優先席。「北海道の人は電車が混んでいても、そこには座らず空けておく。北海道には昔から大事にしていることが今も残っている」と人の温かさと思いやりを感じている。「僕たちファイターズは北海道が一番になるために、自分たちの立ち居振る舞いを含めてちゃんとしなきゃいけない。本当に世界一になろうと思っているので」と『北海道のちから』を伝える責任感を持っている。

監督の住む栗山町の魅力は「土のちから」。北海道の四季を感じながら札幌ドームまで通勤する。「試合に負けてしまっても、栗の樹ファームで自然と接していると、ふと忘れられる瞬間がある。土で生かされている」と『自然のちから』を感じるそうだ。北海道への『愛』に満ちあふれている。

▲ ファイターズマスコットＢ・Ｂ。モヒカンの色は日替わり。

今年の目標は「日本一」。頑張っている選手とその家族、チームに力と勇気を与える北海道に恩返しをすること。その先は「今一緒にやっている選手たちが一流になり、十年先でも『監督、元気ですか。飯でもおごりましょうか？』なんて言ってくれるのが一番幸せかも」と、人のつながりを今から楽しみにしている。卒業生を送り出す先生と同じ気持ちなのかもしれないと感じた。

自分で考える大切さ

「高校生は何でも吸収できる時期。好きなことをとことんやっていれば、目標が見つかったとき、同じように頑張れる」と語ってくれた。高校生はスポンジといえる。「高校卒業は自分の足で歩く第一歩。不安があってもきらめいて、どんなに苦しくても自分のことを信じてあげて」と卒業生へメッセージをくれた。

野球が上手くなるには、体を無意識に動かすための反復練習という。「野球は苦しみながら、何かの拍子に階段を一つ上がることの繰り返し。ひたすら技術を求める集中力と、それをこなせる体力が必要。その積み重ねこそが超一流の人間を作り上げる」。そして、何よりも大事なことは「自分で考えること」。人にやらされるのではなく、自分で工夫して自分からやる意識が大切だ。野球だけに言えることではない。

▲ イチローの反復練習についてわかりやすく説明してくれた。

栗山監督から、人として大切なことを学んだ。監督の人柄が選手をつくるのだろう。北海道に移転して11年目のファイターズ。北海道にはなくてはならない存在だ。たとえ進学や就職で北海道を離れても、ファイターズを応援し続けたい。栗山監督が再び宙を舞い、北海道に再び歓喜の紙吹雪が舞う…。「夢は正夢」となる日が今から楽しみだ。

あの日から３年…

昨年3月、U型テレビの大村正樹さんに宮城県の被災地を取材する機会をいただき、4月に新聞を発行した。その後、気仙沼市の陸地に打ち上げられた「大型漁船」は住民の強い要望で解体されたが、南三陸町の「防災対策庁舎」は保存で震災の教えを伝えるべきという声が多く、結論は出ていない。大川小学校はあの日のまま時間が止まっている。震災廃棄物（がれき）処理場は役目を終え、すでに撤去されたところもある。復興工事は進んでいるようだが、今も行方不明者を捜索し、長く続く仮設住宅生活に心が休まないという。

▲ 現在の防災対策庁舎。地震直後も小雪が降る日だった。

3.11あの日から３年…。わたしたちは今、何ができるだろうか。時とともに被災地の光景は変わっても、そこに寄せる心を変えてはいけない。被災地の多くは漁業と観光のまち。自分の目で見て、話を聞いて、復興に役立つことを考えてほしい。決して震災を風化させてはいけない。「忘れないこと、それも復興です」。この言葉が今も強く残っている。

▲ 南三陸ホテル観洋のスタッフによる「語り部バス」。自らの体験と被災地の現状を生き残った使命感で伝え続けている。

全国選手権大会報告

サッカー部、初出場

歴史ある国立競技場に立ち、開会式で堂々と行進した。試合は0ー3で初戦敗退となり、目標の全国初勝利・初ゴールはできなかったが、田部監督は「今までの全国は強豪相手にボールを奪うことで精一杯。でも今日は自分たちのプレーもできた。チームは成長している」と最後まで懸命にボールを追い続けた選手たちを称えた。

関東の大学に進学したOBや創部1年目の苦労を知る卒業生も応援に駆けつけた。「地区の初戦で大敗したチームが、わずか5年で…。チームは自分たちの誇り」と話す1期生のマネージャー遠山さんは、たくましくなった後輩の姿に目を細めた。サッカー部の新たな伝統が始まった。

▲ 高校サッカーの聖地で入場行進をする選手たち。

卓球部、惜しくもベスト8

卓球日本一を決める全日本選手権。ジュニアの部（高校2年生以下）で1年の佐藤瞳さんがベスト8。「自分らしい試合ができなかった。次はチームに貢献したい」と3月の高校選抜では「北海道から金メダル」をめざし、団体戦に力を入れている。一般の部では高校生ながら6人が出場し、ダブルスで高原・水野組がベスト32と健闘した。

▲ 19年連続で全国出場している卓球部。

“春高バレー”12年連続出場

2回戦から登場し、柏井高校（千葉県）と対戦。相手は昨年度3位の強豪校。1セット目は3年生のエース小室さんの活躍で25ー23と先取するも、2・3セットは前半にできた点差を最後まで詰め寄れず惜敗。2年生の森元さんは「精神面で勝負できるチームになる」と自分に厳しく練習に打ち込み、授業をおろそかにしない。日常生活から日本一の高校生をめざすバレー部員。今年も大いに活躍してほしい。

12 せんせいずかん

オオタニ高校のせんせいたちをご紹介。

オンガクシュニン科マドンナ属
サイトウカナエ

- 生息地
  コンクール審査席
- 特徴
  虎の威をもつ天使
- 天敵
  羊（ジンギスカン）
- 最近の悩み
  ショッピングをする時間がない

高め合う仲間

「鈴木くんは練習量と集中力がすごい。努力が音に出ている」、「片山くんは才能がある。作曲もでき、音感もよくてうらやましい」と、互いに尊敬している。技術を高め合う二人にとって、音楽科の仲間の存在がとても力になり、学ぶことも多い。

それぞれの習慣

コンクールで大事なことは発表前の「深呼吸」。落ち着くためには不可欠という。鈴木くんの元気の源は「コンクール後のスルメと炭酸ジュース」、片山くんは「いつだってチョコレート」と笑顔で教えてくれた。

ピアニストは引き立て役

音楽には現実と少し離れた世界を体験できる魅力があるという。二人はともに聴く人にもそんな体験ができるような演奏を心がけている。「あまり知られていないような曲の良さを広めたい」、「演奏者は主役ではなく、曲の引き立て役」と熱く語る二人の姿は、まるでプロのようだった。

インタビュー

がんばる部員に聞いてみよう！

Ryota Suzuki **鈴木 椋太**
Shu Katayama **片山 柊**

音楽科ピアノ専攻、高校2年生。2013年、片山くんは横浜国際音楽コンクール高校生の部で第1位、鈴木くんはPTNAピアノコンペティションでG級金賞を受賞。２人はともに全国トップクラスの実力を持ち、世界の舞台でも演奏する。